

第2回明日のつばさ展

2020年2月3日(月)～9日(日)7日間

画廊「楽」I

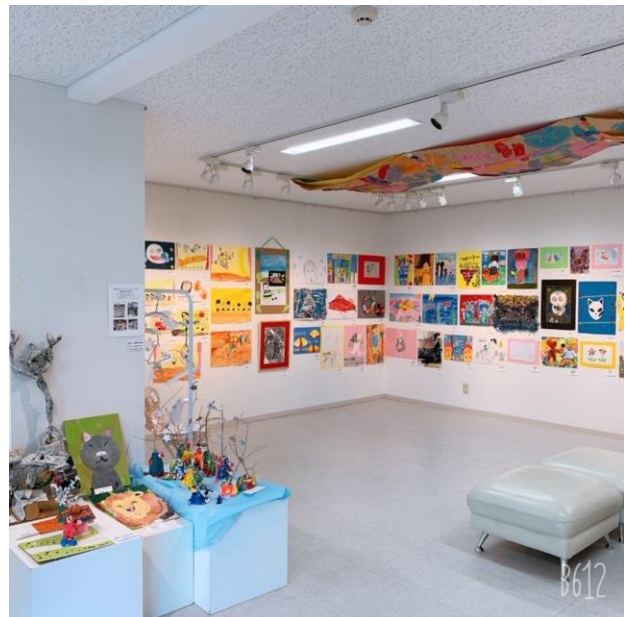
作品タイトル107点:作品総数563点:入場者数:241名

(内:障がいの方、作品245点/44パーセント)

入賞21 作品(内;障がいをお持ちの方 10 作品/48パーセント)

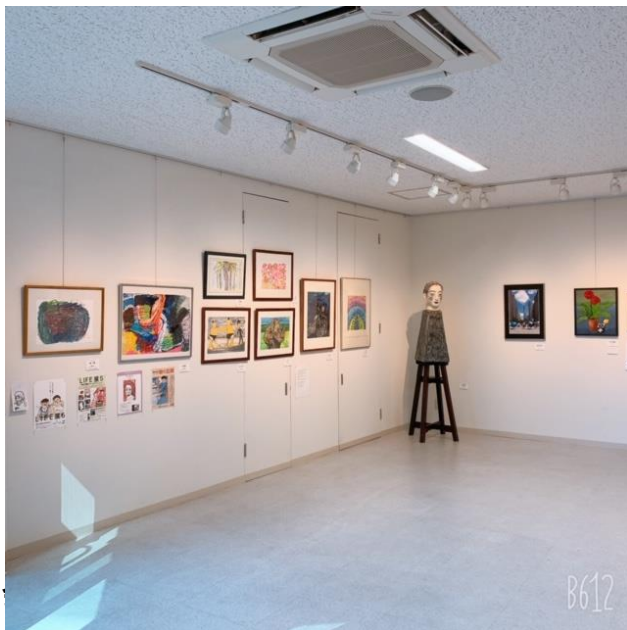


会場風景 1



会場風景 2

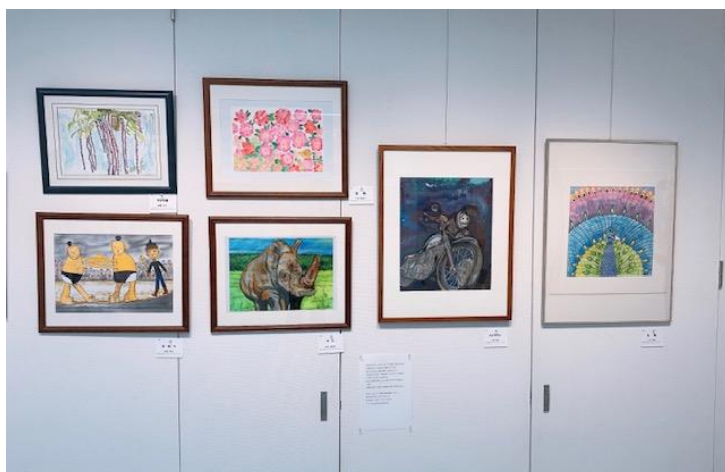




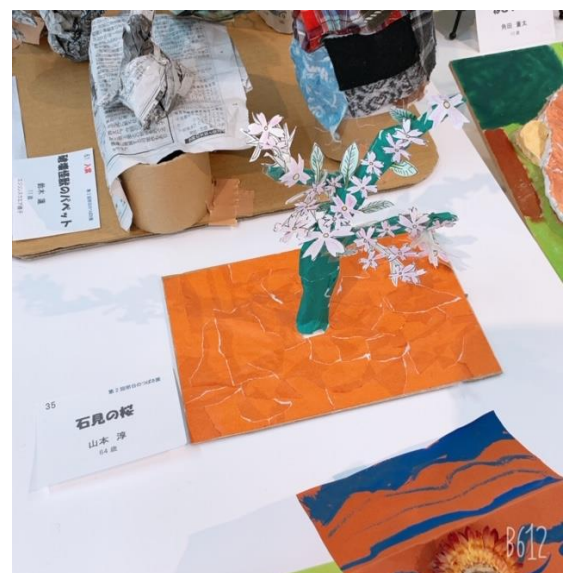
会場風景 4



北海道アールブリュット作品2点



島根県出雲市 NPO法人サポートセンターどリーむ
就労支援B型事業所から 6 点



島根県益田市在住64歳の方
丁寧な紙細工作品
(写真中央:石見の桜)



中央のネズミの絵をはさむようにして、412枚のはがきを展示。
 ハガキはノーマライゼーションを目的に今年の「干支」の絵(ねずみ) 放課後児デイや地区センターなどでワークショップを開催。約4割が障がいをお持ちの方の作品。



障がいをお持ちの方の作品：(社福)帯広福祉協会愛灯学園の利用者(N.Sさん30歳)
 ひとりで半年にわたって描き続けた34作品(タイトルはNHKの朝ドラ:なつぞら)

2月8日(土)表彰式・懇親会

同展示会場にて開催。当法人の千葉景子理事(元法務大臣・弁護士)がプレゼンターです。障がいをお持ちの方や児童がホールなどの会場では緊張してしまうことが多いという経験から、フラットの床や自分の作品の前で褒められることを重視して、展示室内で開催。家族や友達に囲まれて賞状を受け取り、自身の作品を紹介。誇らしげな様子は健常者も障がい者も同じ。会場内は温かい拍手で溢れた。当日は入賞21作品のうち、14作品を表彰。欠席者は本人の希望により郵送または翌日単独で表彰。去年は、出品者の居住地にある施設(島根県益田市、北海道帯広市)を訪問して表彰。



ひととの距離間が苦手な人には近づかず、賞状の受け取りも家族と一緒に。



自分がしてもらってうれしいことは、すぐに自分もしてあげたくなる性格とのこと。表彰してもらって、すぐに自分が表彰者に…。会場の笑いを誘うほほえましい場面。

20作品の審査は、1月26日(日)に展示会場である画廊のアトリエにて、慶応大学文学部西洋美術史担当の先生、神奈川県人権擁護委員子ども委員、西洋画家、インスタレーション作家、当法人副理事長と理事長計6名で実施。さらにオーディエンス賞1点は、開幕後来場者の声をもとに決定。

会期中、神奈川新聞に展覧会の記事が掲載されました。
掲示に神奈川新聞(横浜)とありますが、(広域)の間違いです。
神奈川新聞は後援ではありませんが、冊子の作成を通じて、このような協力をいただいています。翌日は新聞記事を読んで来たという方もいました。

